

京都大学霊長類研究所公開講座 サルに学ぶ ～人間の理解～ に参加して

建設部門 1993年修了 今西秀公



霊長類研究所ホームページより

30年以上前の在学時、教養部(当時)の掲示板に愛知・犬山の霊長類研究所の見学を含む旅行の募集案内が出ていた。有料だったのか無料だったのか記憶がなく、今もそのような学生向けの旅行の募集があるのかどうか知らないが、当時は結局応募しなかった。

それから随分と経ってしまったが、京大ウィークス 2021 の一環として霊長類研究所の公開講座がオンラインで開催されることを知り、さっそく応募したところ幸いにも受講の機会を得た。

2021年10月23日(土)に開催された公開講座は二部構成で、最初の2時間は教授の先生方による講演であった。

最初に湯本貴和教授(研究所長)の「世界の森に霊長類を訪ねて」と題する講演。世界各地を飛び回っておられた湯本教授が霊長類のみならず植物などにも造詣が深いことから、幅広い分野にまたがるお話をされた。例えば、開花条件が限られるため数年に1度しか咲かない植物がその果実を食べる大型動物によって種子散布をしており、大型動物が減ればその植物もまた分布を減らすことなどは興味深く感じられた。また、化石燃料の使用を減らすために植物依存が高まればそれが森林破壊につながるので「見せかけの環境主義である」と批判されていたのが印象に残った。

次は高田昌彦教授の「脳の進化と病」と題する講演。脳の大きさが限られることから、表面積を増やすために脳の「しわ」が増えること、「脳地図」なるものがあって、それが運動に密接にかかわっていることなどを話していただいたが、このようなお話は教養部の講義で聞いたかどうか、本当にそれくらいの記憶しかなく、日常業務の忙しさにかまけて普段知識の幅を広げる努力をしていないことに気づかされた。技術士たるもの、やはり継続研鑽は必要である。

少しの休憩をはさんで、残り1時間ほどは「動物園のサルを観察しよう」と題する実習で、研

究所に隣接する「日本モンキーセンター」のサルたちを見るというものであった。実習といってもオンラインなので、こちらからは質問するくらいしかできないのであるが、サルの動きに合わせてカメラもターゲットを絞って視点を変えてくれるのである意味現地で見るとよりも分かりやすかったかもしれない。

ニホンザル、リスザル、テナガザルの説明があったが、やはりニホンザルについては参加者からの質問が多かった。湯本教授が説明されていたが、いわゆるボスザルというのはあくまで人間が作ったイメージで(専門用語としては「アルファ・メイル」というらしい)、実際にはボスらしい役目などはしておらず、やっていることは力の誇示とメスザルを追い掛け回すことだけなのだという。実際当日も一匹のメスにご執心でずっと付きまとっていた。ところがめでたくペアになってもその期間が長くなると次第にメスの方から嫌って相手にしなくなるとのことで、人間の世界とちっとも違わないじゃないかと思わず笑ってしまった。